青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
発行人 斉藤希弌
印刷所 オリオン印刷㈱

青陵健児の像完成

本日除幕式挙行さる

青陵健児の意気を示す像の建立がかねてから強く望まれていたが

此度第三六回卒の日展審査員渡辺徹先生のノミで、二米に達する青銅の青陵健児像が完成し、七月四日午後三時半、青葉もえる本校前庭で除幕式がおごそかに、しかも力強く挙行された。

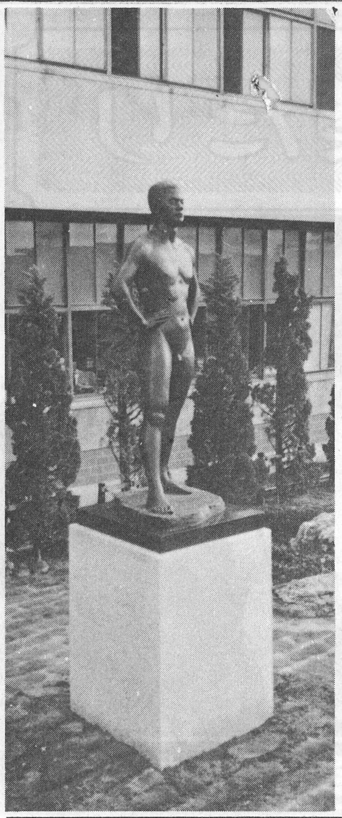
学校長、会長以下各役員、製作者渡辺徹氏、生徒千六百名が見守る中、おごそかに修祓の儀が始まり、次いで雅楽吹奏のうちに生徒代表高橋卓、田中悦子両名の手によって幕が静かに降された。

見よ！二米の青陵健児像。そのたくましい姿が校舎を背景に雄々しく立ちあがったのである。この青陵健児像は、全国各地に発展する青陵健児を象徴するにふさわしい均整のとれた力強い像である。

次いで白山神社宮司 小林直一の祝詞がおごそかにひびくうちに、青銅の立像に青陵魂がこめられて、肉体、精神共に青陵健児となったのである。

終って、製作者渡辺徹氏に感謝状が贈られ、青陵健児生徒千六百名による応援歌大合唱、出席者全員の万才三唱の後めでたく除幕式を終了した。

登下校の際に、この像を仰ぎみる在校生の意気高揚を期待するものである。



嗚呼 青陵に生気あり

健児の像の象徴するもの

幹事長 斉藤希弌

嗚呼 青陵に 生気あり

われわれが嘗て、そして現在においても尚、折り折りに口ずさんで忘れてあるまじきこの応援歌の発頭句を、忽然と物の形に移し現わしたかのように、青陵健児の像は本日入魂の式を執り行ない、緑の芝生の真ん中にしっかりと座を据えて除幕されたのである。

まことに眼にもさわやかな若人（わこうど）の青春の息吹（いぶ）きの匂うような立派な出来栄えである。

おそらく作者としても最近の会心の作品として、後々心に残るものの一つであろう。

かえりみれば一昨年の八月、建設委員会が発足してから丁度二年近くを経過したわけである。その間（かん）、われわれもいささかならず気を揉んだこともあったがさすがに日展審査員の貫録で作者は少しも慌てず、悠々として構想を練り、すばらしいモデルを発見するに及んで意欲大いに進み、いくたびも試作を重ねて、遂にこの力作を完成されたのである。

あらためてご労苦に対して深く感謝の意を表すものである。

この像は当初から青陵健児の像なる仮称で呼び慣わしてきたのであるが、今後も引き続きそれが通称として使われることになるであろう。

実は三月の委員会で、像の正式の名称（決定すればそれを台座の石に彫りこむ構想であった）について論議した結果、芸術作品にあっては、作品その物が一切を表現しているものなるが故に、特定の名称を付ける如きは真実の印象と理解とを誤らせるおそれありという結論に合意して、審議の資料として用意された五十種に近い名称（生徒並に先生方が公募された）は一切取り上げなかった事情があったからである。

たゞ、ああ 青陵に生気ありが、その際圧倒的に支持された事実を、記録として留めておくことにする。

今、眼前にこの像を仰ぐわれわれは、作者親（みずか）ら青陵の伝統に培（つちか）われて人間となった一人として、一筋にこの像の完成に打ち込んだであろう祈りと願いとが、脈々とわが胸に感じ応えて、無言の啓示としてありがたくいただき受けるのみである。

在校の後輩諸君。この像は正に君たちそれ自身だ。そして正に君たちのものだ。

どうかありのまゝに受け取ってくれ給え。

「東京青山同窓会」報告

64回 坂井俊一
（経営コンサルタント）
（東京青山同窓会常任委員）

東京青山同窓会は、一昨年まではいわゆる「戦前派」のみによって運営され、戦後の若い同窓生はほとんど参加していないというのが実情であった。

一昨年春、東京新潟県人会館に若い有志が多数集まり、われわれも同窓会活動の一端を担って、より一層親睦を深めようではないかと気炎を上げ、先ずヨコの連絡を強化するため、五十回卒（昭和十八年）以降の会を結成しようということになり、ただちに名簿の作成にとりかかった。

名簿は、中村幹男氏（五十四回卒）を中心として、各年度ごとに選出された委員の献身的な協力で約六百名の人員を収録し、装禎も立派なものであったが、惜しいかな、花の命と名簿の寿命は短いもので、一昨年作成した名簿が、二年後の今日、転勤や転居による変動または掲載洩れ等によって、利用価値が半減していることは否めない。

そこで、過日の委員会において新しい名簿を作ろうという声が期せずしてあがり、私も賛成した一人であるが、さて、その責任者を決める段になると、これはと思う先輩諸兄が適当（？）な口実をもうけて辞退され、「幹事の若返り」という大義名分のもとに、アッという間に、委員の中では最年少の部類の中に入る私のところにお鉢がまわってきたのである。

今度の名簿は、五十回卒以降に限定せず、それ以前の先輩方々にも広く呼びかけて、東京地区在住の同窓生をできる限り網羅したいという点で意見が一致している。五十回卒を境として、東京青山同窓会が二つに分れている現状について、東京は過渡期だからやむを得ないとしても、同窓会本来のあり方からいったら、当然一本化することが望ましいので、今後は四十九回卒以前の先輩諸兄とも連絡をとり合って、一本化の話を具体的に進めていきたい。

いずれにしても、「組織の一本化」より一足先に「名簿の一本化」が実現するわけだが、掲載する人員も二千名程度になるので、決して容易な仕事ではないが、委員全員が一丸となって愛校精神に燃えており、遅くとも十月には完成して、十一月に開催される総会を一層盛り上げたいものと考えている。

目下の課題は、印刷費約二十万円の捻出方法であるが、このうち十五万円を広告収入で賄おうというソロバンをはじきだした。一部の先輩には、義理でおつき合いを願うような結果になり、私達としても心若しいのであるが、これも資金ゼロの会の苦肉の策なのでご勘弁願いたい。

名簿作成委員を仰せつかってから約一カ月間、数多くの先輩と会って感じたことは、例外なく非常に好意的で、当初心配していた広告料なども、なんとか目標額に達する見通しである。

同窓会のいい点は、たとえ初対面でも、地位や年令の隔たりを忘れて話し合えることである。社会のあらゆる分野で、青山健児が活躍している姿は、実に楽しく、また心強い限りで、同窓会活動もまた楽し」と思うのである。

発足二十周年を迎える通信制

通信制主事 鈴木昭二

昭和二十三年勤労青少年に対する教育の機会均等の精神にもとずいて発足した高校通信教育も昨年二十周年を迎え、いわゆる成人に達しました。本校においては初代主事岩野祐吉先生をはじめとする関係者の努力によって二十三年四月に新潟高校通信教育部として誕生しました。以来三十四年三月はじめて卒業生二名を送り出し、三十六年に全・定と並ぶ通信制となり、今春は七十三名の多数の卒業生を出し、専任教職員も二十四名を数えるまでに成長いたしましたこれも一重に本校教職員、生徒、及び同窓会先輩諸兄の御協力の賜と関係者一同常々感謝している次第です。

この道に入って感じたことは、いわゆるマスプロ的な教育の中にあって、ここに一つの教育がある、ということ、そしてこの教育に対する社会の認識がまだ十分でないことでした。通信制の生徒は学問意欲、能力をもちながらも辺地在住、家庭事情、職場の無理解により全日制、定時制に進学しなかった人が殆どであり総じて孤独感が強いようです。この狐独感が核となって意気の阻喪を来たしている生徒もあるようです。しかし中には我々教師以上に精神的に強いものを持っている生徒も数多くいます。したがって指導上最も効果のあるのは単なる感傷的な慰めではなく、その学力の補強でありそして変らぬ友情による励ましであると思います。学校は教育の場であると共に理解の場、憩いの場でなければならないとも感じています。通信制は個別指導、自学自省を本体としていますが、自分自身の積み重ねた実績がものをいう今にあっては勿論のこと、いつの時代にあっても自学自省は学ぶことの基本と痛感しています。

本校通信制のモットーは、奉仕友愛、団結でありますが職員生徒の親密さ、一体となってかもし出す家庭的雰囲気は他校に例を見ない伝統的な特色と信じています。

県内にはなお万余を数える定通未修学者がいます。社会の要請もあり、僻地や後進性の強い県内各地の勤労青少年に学ぶ事の喜びを一人でも多く感得させ多数の卒業生を出したいと思っています。そのためには各関係者、企業の理解を得て教育条件を整えることが大切と考えています。高校通信教育はここ数年来その整備と拡充のために大きく変貌しています。全国的趨勢の企業よりの集団入学、定時制との併修あるいは技能連携、定通センタースクール等問題は山積しています。現在の所本県では大企業も少く本校はこのような問題に当面してはいません。しかし本県産業経済の発展に伴いいずれはこの問題に取組むことと予想されますが地域性や通信制の独自性をふまえて取組んでいく所存です。そしていかにその方法が変貌しようと本校の伝統を一層高める一翼を担いたいものと期しています。通教同窓会員も二〇二名を数えていますが、いつでも青山同窓会員として胸を張って歩む実力をもつ会員となるよう努めたいと希念しています。

校舎外の整備進む

校舎の復興も殆ど終り、漸く校舎以外の整備に手を着けることが出来るようになって来た。

渡辺校長着任以来校舎外の整備に力を注がれ、さらに正門とそれに続く生垣が完成して外観を一新したが、今年度事業として校舎前の庭が出来上って、緑映える芝生に龍安寺式に石が美しく配置され赤く咲き乱れるつゝじの調和が見事である。また特別教室前の中庭に温室が移転新築され、こゝを拠点にして生物クラブの生徒が環境美化に活躍してくれることが期待される。この温室に隣接して軟式庭球コートが全く新しく作り変えられ緑の金網に囲まれて完成間近かとなった。

校舎外

新築された温室

完成近いテニスコート

特集 栄光燦たり

不撓の意気は焔と燃えて

41回 本間敏雄
県立図書館長

撃剣の法を知り、国家の
千城となる
不撓の意気は焔と燃えて
侃諤の義は我にあり
世に蔓延れる醜草は
薙がすば巳まじ秘め佩ける
降魔の利剣我が手練

これはわが新潟中学校剣道部の部歌である。漢文口調の意気颯爽（さっそう）としたものでこれを高らかに歌う部員の姿も想像できる。

剣道部史をひもといてみるとまさに侃く諤くの気概をもって不撓の意気の下連年努力を重ねてきた健児奮斗の跡がみられる。

筆者が新潟中学生として勇躍校門をくぐったのは昭和四年のことで国内外の情勢が漸く緊迫化した頃であった。

その頃純真な新入生は入学そうそうにして獰猛？な上級生の蛮声をあげての入部勧誘演説を聞かされた。筆者は進んで、剣道部に入ったが入部するや否やその部の伝統を知らされた。

青山剣道部の歴史は遠く明治にさかのぼる。新潟中学校が創設されたのは明治廿五年七月一日のことであるが、その翌年の九月二日に早くも撃剣部の創設をみた。その創立発会式の模様を左の如く伝えている。

当時の校長平井正先生の挨拶につゞいて県知事の訓辞があった。

智仁勇三の者は天下の遺徳なり智あり、又仁あり、而して勇なければ其の行達せず、其の事廃す。国家大中小の学校体操の科を置くは体育の欠く可からざるを以ってなり。……殊に尚武の志気を存し、又我国固有撃剣の法を知り国家の千城と為らざるべからず。是れ本校体操科中に撃剣術を加え今日を以て其の業を始むる所以なり。有為の諸子能く此の意を体し研磨励精せよ。

明治二十六年九月二日
新潟県知事従三位勲三等
篭手田安定

流石邸内に道場を造ったといわれる知事丈けある。剣道に対して非常な熱意を示していた。

式後古流の型、法定の型、撓の型等が撃剣教師によって見事に公開された。剣道部の発足はかゝる由緒あるものであった。剣道部は技とともにその精神を鍛える部として若さにあふれる当時の青少年には魅力あるものであった。

爾来七十五年、古くして光輝ある部の歴史の中から幾多の俊秀が生れた。今日各界に縦横の活躍をされている先輩、後輩諸賢を見ると往昔の勇姿がしみ〴〵偲ばれる。

苦節幾星霜

剣道部の初期は撃剣部といわれ指導の任に当った教師は村上藩士新発田藩士、庄内藩士、警視庁警部、陸軍戸山学校出身者という今なお武士気質をもった錚々（そうそう）たる人たちであったのでその指導は厳烈をきわめた。

大正に入っても剣道部特有の熾烈な練習は青陵健児を鍛えて一つの風を形成していった。

大正六年二月の寒稽古納会を記して遊方会雑誌は次の如く述べている。その気構えの一斑を知ることが出来よう。

……青陵健児を以て世に誇る、我等何ぞ風伯の猛威を恐れ厳寒に屈せんや。而して真に剛毅なる精神を練り健全なる身体を鍛えんと欲するに何すれぞこの好季を逸すべき。宜しく武を練り剣を磨き以て心身の鍛錬をなすべきの時なり云々。

厳寒膚をさく冬にこの猛練習あり又暑熱焼くが如き夏にもわが剣道部は練習に練習を重ねていった

しかし仲々勝利の栄冠を得る機迄に恵まれず髀肉（ひにく）の嘆をかこっていた。

しかし先輩苦斗の歴史のつみ重ねは昭和に入って俄然輝きを増す

昭和初期には部長は高橋教官、副部長は倉田教官、係は沢田教官伊藤教官であった。

その頃の部報に

来れ一千の健児斯道錆沈の挽回は汝等の双肩を待つ。

来れ一千の健児青山の意気錆沈挽回の事業は我部に於て潑剌たる汝を待つ。

と悲憤慷慨の檄文をとばせているのが見うけられる。

栄光に輝く

剣道部は整然とした秩序と規律下たゆまざる精進をつゞけこゝに優勝の凱歌を聞く時が遂に来た

昭和二年七月二十八日に金沢第四高等学校主催の関西北陸剣道大会が同校道場無声堂に開かれた。四高の勧誘を受けて一行十四名の選手はコーチの早大大森選手と倉田教官に引率されて金沢市の宿舎油屋に陣取った。これより先部員はこの大会に臨むため夏休に入ると寄宿舎に合宿し大森選手の指導を受け練習に練習を重ねたのであった。当日大会に参加した学校あわせて二十三、各校の剣士約三百名であった。この大会には惜しくも準決勝において神通中学に敗れ無念の涙をのんだ

しかしこれが大きな奮起のもととなり、その年の十月十七日、長岡中学に開かれた第十二回県下中等学校武道大会において見事中原の鹿を射とめた。

この大会には大屋恒夫、相馬雄三、田中清太郎、風間利吉、鍋谷貞三の五選手が出場したがすべてこれ斗魂のかたまりともいうべき活躍をした。

一回戦
新潟中学　4－1　六日町中学

二回戦
新潟中学　3－2　巻中学

三回戦
新潟中学　5－0　柏崎商業

かくして決勝戦に臨んで新潟商業を三対二で破った。

嗚呼、雌伏幾星霜、遂にわが剣道部は優勝旗をしかと手にしたのであった。

晴れの表彰式には団体一等の賞状とともに個人優勝として一等相馬雄三（全勝）二等風間利吉（全勝）二選手に県体育会々長藤沼庄平知事から賞状、賞品が授与され特に相馬選手には名剣優勝刀が授与されて面目をほどこした。

これから剣道部の歴史は輝しさを加え、連年錚々（そうそう）たる剣士を生み各地に転戦して万丈の気を吐いた。

このゝちの大会において特筆すべきものとして昭和七年六月十九日に挙行された新潟高等学校主催新潟新聞社後援の第二回県下中等学校剣道大会があげられる。この日集った県下の若武者数百、文字通り精魂を尽しての熱戦が展開されたのである。

この前年の第一回大会には剣道部から清野春二、高杉寅三、小松大作、伏木弘、村山喜八郎の五選手を送り見事優勝の栄冠を得たので今年は連覇の気魄物凄く寄居原頭の大会場に臨んだ。

当日出場選手は先鋒上原篤次郎二陣池主　憲、中堅片桐靖門、副将高橋正行、大将成田光吉というベストメンバーであった。その模様は新潟新聞に大々的に報道され大いに紙面を賑わした。冒頭

空前の接戦を続け
新中遂に優勝す

第二回県下中等学校剣道大会は十九日午前九時より開始され午後七時半に至るも勝敗決せず最後のABC三組で優勝戦を……

と記している。

試合は三組に分かれ、A組は新潟商業、B組は加茂農林、C組は新潟中学が夫々全勝し、この三校でリーグ戦を行うこととなった。

これを伝えて新聞は

最後の覇権を争奪することになった新中、新商、加農の技倆は肩々相摩す間にあり、決勝戦は異常に白熱化し、新中、新商、加農の三校はリーグ戦として剣戟の火花を散らすこと二度に及んだが結局二回のリーグとも三校各一勝一敗の同戦績となり…仲々優勝を決するに至らなかった

そこで八時より各校代表一人で雌雄を決することとなった。新中代表片桐初段、新商代表味方初段加農代表石川初段という錚々たる顔ぶれであった。その状況を新聞記事によって示そう。

空前の接戦を続け
新中遂に優勝す
二等は加農、三等新商と決定
高校主催の劍道大會
三巴の爭覇戰
決勝戰
一等 新潟中學
二等 加茂農林
三等 新潟商業
優勝に醉ふ應援團
本社前で解散
四銀行員の庭球リーグ戰
第一位は第四銀行
内科
X光線科

昭和七年六月二十日
新中剣道部優勝記事
（新潟新聞）

真に息詰まる大演武戦が展開され場内をうづむる観衆は片唾をのんで緊張していた。母校の栄誉を一身に荷ふて立つ我等が代表選手の奮戦を応援する新中、新商両校応援団は空腹を抱へながらしかも一人だに身動きもせず晴れの母校選士の一進一退に眥を張って熱援し暮色漸く深からんとする寄居原頭に屯して母校の快勝を祈っている有様は真に空前の大剣道試合である。……

当時剣道部員で四年生であった筆者は朝来出場選手の身のまわりの世話をしていたが、この時になると純真な気の赴くところこの緊張の絶頂の場面を見るに忍びず、既に暗くなった戸外に出て高台に登って天に向って勝利を祈り、道場より聞える歓声に一喜一憂をしていた。ところで大会の現場はいかゞであろう。克明に新聞は伝えている。

新中代表片桐初段は第一回戦に頸敵新商味方初段の胴と面をとり、第二回戦には加農石川初段の小手と胴を切って遂に新商加農をなぎ倒してこに元気者片桐君の獅子奮迅の切先は目出度も新中に辛勝の凱歌を奏せしめ、数百の応援団も味方の友士をも感激の涙にむせばしめ午後八時十有一時間に亘る大演武戦の幕を閉ぢ栄ある本社優勝旗は岡上新潟高校長の手より新中片桐君の手に授与された。

優勝旗を授与された新中選手の感激感動もさること乍らわれ〳〵部員も感激の涙滂沱（ぼうだ）たるものがあった。

空前の接戦を続け新中遂に優勝す。二等は加農、三等新商と決定。

という文字は今でもわが心に焼きついている。

この夜優勝に酔った新中応援団は暗闇の高校グランドにおいて出場選手を囲んで「つわものらつわものら」の応援歌を高唱し、心からなる感謝の言葉を述べたあと、千名近い生徒は青陵健児の意気たからかに燃ゆる三角応援旗を手に手に隊伍堂々と寄居原頭を下って柾谷小路十字路近くの新潟新聞社まで行進し、本社前で万歳三唱して九時半解散した。

筆者はこの息づまるような熱戦に際会し、来るべき年にはこの光輝ある伝統を受けつがなければならぬと思うと血潮のたぎるのを覚えるのであった。

年かわって昭和八年の春を迎えた。当時県下の中等学校が一堂に会して剣道の覇を争う大会は一年に三回あった。新潟高等学校主催のもの、長岡高等工業学校主催のもの、そしてもう一つは中等学校体育連盟主催のものの三つである

この年にはわが剣道部は三回の大会に二回優勝を遂げ伝統をいやが上にも輝かせた。

昭和八年九月廿三日、長岡高等工業学校主催の県下武道大会が長岡市の同校武道場に開かれた。出場選手は田代辰夫、増田静雄、星名孝平、大橋正一、本間敏雄の五名であった。

この大会にはわが選手はまさに破竹の勢で勝ち進んだ。

一回戦
新潟中学　4－1　小千谷中学

二回戦
新潟中学　5－0　佐渡中学

三回戦
新潟中学　4－1　村松中学

決勝戦に加茂農林と対したが四対一で勝ち、文字通り天馬空を駆けるが如く連戦連勝、栄ある優勝旗を手にすることが出来た。個人優勝者として一等増田静雄、三等本間敏雄が表彰された。

やがて年度最後の武道大会が秋十月十七日、高田中学武道場に開かれた。この大会は例年神嘗祭といわれる十月十七日の祭日に開かれたのであるが、これが終るとわが部では五年生が四年生にその実権を譲って上級学校の受験勉強に専念するのが恒例となっていた。それだけにこの棹尾の大会は選手にとって思出深いものであった。

この大会には前記五人が出場した。先ずリーグ戦が行われて

新潟中学　3－2　村上中学
能生水産　1－4　新潟中学
高田中学　2－3　新潟中学
有恒学舎　0－5　新潟中学
新潟中学　5－0　佐渡中学

と勝ち進み、結局柏崎商業二十点、新潟中学二十四点、新潟商業二十二点、小千谷中学二十三点を得て夫々各組の勝者として残った。

準決勝
柏崎商業　2－3　新潟商業
新潟中学　4－1　小千谷中学

いよ〳〵決勝戦に好敵手新潟商業と対戦し雌雄を決することゝなった。新商剣道部は連年よく健斗し、青山剣道部にはよきライバルとして部史にしば〳〵出てくる強豪である。決勝戦に臨む時は既に暮色迫り、場内には電灯がともり満場の観衆は只々固唾をのんでその成り行きを注視しているのみである。剣を交える双方の裂帛の気合は場内に響き、その場の空気をいやが上にも緊張させる。試合は互角に進められ大将同志のところで三対二となり、而も一本一本勝負というところにいたりまさに緊張の度は最高潮に達した。新中の大将田代二段は健斗よく頑張り、最後に果敢な飛面で攻めたのが功を奏し遂に審判の手は新中側に上った。どっと喚声があがる。今迄手に汗を握って注視していた選手は我を忘れてとび上った。無限の感慨を胸に秘めて終りの礼をして選手が自席に戻った時、高橋部長がとんできて一人〳〵選手の手を握って「よかった〳〵」といってくれた。

感激の涙が下るのをどうすることも出来なかった。

このゝち昭和九年度、昭和十二年度にも県下の武道大会に優勝して青山剣道部の名を県下にとゞろかせた。これらのことは紙面の都合で割愛した。

たゞ最後にこの栄光輝くわが剣道部を育てゝ下された、斎藤庫四郎先輩（第一一回卒、後に喜十郎と改名）を忘れてはなるまい。先輩は私費を投じて斎藤道場を開き後輩を指導育成された。部員は在学中は勿論卒業後もこゝに通って猛練習をして指導を受けた。道場での土用稽古、寒稽古は年輩の新中剣友会の人々には懐しき思出となっているであろう。

清流七十五年、青山剣道部は幾多の栄光を伝えつゝ今に至っている。

母校を語る

信念を有言実行

快適だった中学生活

36回 斉藤英四郎
八幡製鉄㈱専務取締役

（五月末の株主総会で専務に栄進された。すぐれた経営者であると同時に、わが国鉄綱界における販売関係の第一人者でもある。第三十六回卒業生）

私の家は代々北蒲原郡安田村の地主だった。父の代に東京に出たんですが、父が病気で帰郷してからずっと新潟市に落着いたのです男ばかり五人兄弟だが、そろって新潟中学に学びました。

家は新潟医専（今日の新潟大学）のそばで、近くに白山神社があった。この神社の春祭り、夏祭りはたのしかった。堀があってよく魚やかにをとりに行ったもんです。なつかしい想い出ですね。学校に行く途中に、そうそう、豚小屋があって、菜の花が綺麗で、毎日歩いて通ったものです。新潟は気候風土がよく、人情もなごやか、本当に快適な中学生活でしたよ。

昭和初年は思想問題のやかましい時代だったが、私は真面目な中学生でしたね。穏健な生徒だった成績もいい方だったでしょう。

（控え目な表現だが実は大変な秀才、四修で新潟高校へ、ついで東大へ進学した。兄弟そろって秀才一家。長兄・三兄・末弟の三氏はいずれも医学博士、次兄宏氏は日本信託銀行の専務である。）

寮がありましてね。市内通学者以外はここに入った。うらやましかったですね。校風は剛健の一字当時市の人口は十万位で県立中学は新潟中学だけだったから、なかなか狭い門でした。先生方も立派でした。権威がありましたよ。校長先生は名和先生という、これは立派な方でした。

運動が盛んでした。とくにボートと野球。ほぼボート部は今もありますか。新潟商業との定期戦があって、敗けるとがいたん演説があり、上級生にしぼられたもの新中生活で培われた野性味というものはなくなりません。三高や四高のをもじった応援歌が多かったな。強わ者強わ者というのがあって、カルメンの節で歌ったもんです。

副知事をしている君君、味噌醤油をやっている小川泰三君など今でもお付き合いしてますよ。旧友はいいですね。

男の児と杉の木は育たない？私は新潟高校に入ったんだが、女の関係と思想問題で落第する人が多かった。女にもてるもんで堅実な子が育ちにくい、という面があったでしょう。新潟の女性は働き者です。それに経済環境も比較的裕福ときている。そんなことで相対的に男がグータラになる、そういう面もありますかな。

いまの母校の生徒はあまり知らないけど、一般にいまの若い人はしっかりしていますね。教えられることが多い。老人を凌ぐものを持っています。ただ方向づけが甘いんじゃないかな。この点だけです、問題は。歌にあるでしょう。二人のために世界はあるの。あれですよ。権利の主張だけが先きにくる。自分の幸わせにも通ずることをもっと知って欲しいですね。

後輩に一言？そうですね。信念を持って、一貫してこれを主張し実行して行けば何時かは必らず報いられるものだということ。右顧左べんしていては結局皆に棄てられてしまう。有言実行する誠実さ、これが大切です。

それから大所高所からものをみるように心掛けて欲しい。一本の木には虫葉もあるが、そればかりに気をとられず、大きくみたい。カッカとすることでも一晩間をおいて考えてみると、案外詰らぬことが多い。

粘り強くあれ。柿の実は赤くて甘いものと思うけど、この甘い実が結ぶまでには、風雪にたえた歳月が必要なんですね。亭々たる枝ぶり、その力強さ、これが出来るまでには苦しい道程があるんですよ。私たちも、ここまでくるのにずい分我慢をしてきたのですよ。

卒業生の進路

＝大学合格者状況＝

受験者数七九万人といわれた今年度大学入試は、本校においての受験者数七二七名（新卒五〇六名旧卒二二一名）とこれまた史上最多の受験者数であった。その結果は入試の激化にともない合格率は六一・一%（新卒五六・三%、旧卒七二%）と昨年に比しやゝ低下した。

今年度入試の全国的傾向としての、私立大学の競争の激化、浪人勢の進出といった問題が、本校の結果に相当大きく影響を与えている。各大学別合格者数は別表の通りであるが、こゝで東京大学合格者数一四名は、こゝ数年の最多合格者数であることを特筆しておきたい。

43年度 大学合格状況

国・公立大		私立大	
新潟大	82	早稲田大	93
東北大	16	中央大	50
東京大	14	慶応義塾大	28
山形大	8	明治大	26
東京工業大	7	東京理科大	21
京都大	7	日本大	18
静岡大	7	青山学院大	17
東京教育大	6	立教大	15
一橋大	6	上智大	14
埼玉大	6	同志社大	13
電気通信大	5	武蔵工業大	12
富山大	5	芝浦工業大	11
信州大	4	法政大	9
北海道大	3	国学院大	9
東京外国語大	3	立命館大	9
横浜国立大	3	東海大	7
高崎経済大	3	津田塾大	6
その他の大学	31	その他の大学	68
小計	216	小計	426
国公・私立短期大学及び各種学校	29		
総計	671		

京都からの便り

69回（高13回） 小林昌二
京大文学研究科

「春は曙、やうやう白くなりゆく。山ぎは少し明りて、紫だちたる雲の細く棚引きたる。……」（点は筆者）は枕草子の有名な一節です。新潟で生まれ育った私は、新潟高校一年生の授業の折に、清少納言の大袈裟なわざとらしさを「紫だちたる雲」なる言葉の中に見出したものでした。

しかし、京都で勉学に勤しむようになってから既に八年目を迎えている今日、右の感想しか持てなかった新潟の風土のことを逆に考えない訳にはいかないのですが、それはここで紹介しようとするものではないので省略し、むしろ京都とそこで学び元気で活躍している青山の仲間たちのことを述べていきましょう。

新潟市の人口に百万を加えた人々の住む京都は、やはり、街筋や車の数や、そして夜の巷のネオンなどにその都会ぶりがうかがえます。やはりと云ったのは京都は田舎だからです。実は、一旦小高い所から一眺めしたとき、なだらかな山々に三方をとりこかまれている京都では朝な夕なに美しい色彩の変化が、山や雲や空をスクリーンにして写し出されるのです。また散歩の折に少し歩けば山道にさしかゝり、蛇やとかげの姿を見たりするし、夏には蟬のうるささに耳をふさぎたく思ったりすることがあるからなのです。都会と田舎の同居する京都。そして、更に一般に知られているのは古いものと新しいものが同居する都市京都のイメージです。これは勿論景観としてもある訳ですが、京都人の生活感覚とか思考とかの中に見事に統一されてあるように思われます。それは、政治的意識の中に見られます。世間一般でいう保守とか革新とかではなくて、京都の人たちは自らの生活の仕方を守ろうとする点で旧守的ですが、これを政治的に保証しようとする点で革新的にあらわれてきます。「お茶漬さらさら」をたのしむ食事、お祭りには家ごと御馳走を作ってたのしむ、季節の移りかわりに敏感な生活、等々は相変らずですが自分たちのお祭りが一部観光業者に私物化されたり、緑多い自然を破壊されたりすることには率直に怒ります。現にそうしたことがすすんでいるとき、その原因を現在の政治の中に見出すところから高い政治認識に達するように思われます。京ことばのやわらかさにもかゝわらず、特別世話好きであるようなことはなく、むしろ都会的個人生活の意識は新潟にくらべてはるかに強いようです。

こうした一見相対立するものが京都という都市の景観にだけでなく、そこの市民の中に統一されてあるのです。これを知らないと何が何だかわからなくなることもあります。しかし、どこの都市や地域においても多かれ少なかれあることですが……、私よりもいささか人生経験の少ない受験生、新入生、浪人諸君にとってはこうした指摘は少しばかりは役立つのではないかと思います。私を含めて現在京都の大学で勉学している諸氏は、高校時代の修学旅行の際の良き印象がふくらんで、反戦自由の伝統や、民主的学風を慕うといったことが、その他の理由と結びついて京都の大学へ志したものです。

次に以上のような環境と京都に遊学した青山同窓の仲間たちがどんな集りを催したりしているか紹介しましょう。今年度についてですが、

四月廿七日（土）青山同窓生を中核にして新潟市の各高校出身者による「スキヤキ」コンパが京大近くの寿司屋（？）「十両」にてもたれました。これは「スキヤキ」をつつきあい酒をくみかわし旧交を暖めると共に大いに新入生の観迎をしようとしたものです。幸いなことに、三十余名の仲間たちが集まり、新入生の新鮮な感想、迎える側の経験を交換しあい、これからの友情を深めたえたようです。今年の会の特徴は二つあってそのひとつは、女性が七、八名参会したことにあります。更にもうひとつはそのことと関連してLADYと男子との会費の差が明確にされていたことです。

続いて五月一九日（日）午前中早くから、保津峡、高雄方面にハイキングが計画されたのですが、これは残念ながら雨で中止の巳む無きに至りました。バーベキューで喰い盛りの諸氏を釣ろうとした努力が見えていたのですが……。

中止の可能性がある催しに懲りたためか、今度は葉書の招待状で見えてるかぎりの判断ですが、六月十五日（土）にボーリング大会を催したようです。注目すべきは「会員以外は女性に限り二〇〇円で参加を認めます。」の但し書きがあったこと、これは、未だ女友達のない連中と、ある連中が共に参加したいと思えるように企画者が親心を発揮したものと思われました。こうした皆で顔をあわす会の他に先輩、同輩のアドヴァイス、議論、下宿さがしから受験生の世話にいたるまで個々のつながりでの活動がある訳です。むしろ実際そうしたことが一定の大切さをもっているようです。何故ならば前に記した京都の都市の特質の如く新潟とは聊か趣を異にした京都で親許を離れたばかりの人たちにとって、とりわけ知人親戚のない場合、青山でつながらざるをえない理由があるからです。京都における同窓会は、高等学校時代に互いに知らない間柄であった人たちをつなぐ意味をもっております。それを果せばほゞ目的が達せられるように思います。それも一定の期間においてです。というのは、人生観世界観から勉学の方法にいたるまで議論のできる仲間は、次第にクラス、クラブ、サークルの中に見出されるようになってくるとともに、二回生、三回生にもなると、自らの主体的社会的関係をつくっているからです。しかし嘗って味った未知なる都市、大学という未知なる世界に期待と不安を抱いて自己が対置されたときの暖かい歓迎を忘れることができないのか、一年、二年の後に、今度は迎える側にまわって歓迎したく思うのでしょうか。こうした会は、昭和三五・六年頃に三人でもたれたこともあるときいております。が今日のように京都大学だけで三十五名の青山同窓生がおり、正確ではありませんが京都全体で百名ちかい諸氏がおられるようになったこともあって、にぎやかな会合がもたれるようになりました。

以上について他大学や最近の若い人たちの一人ひとりについて十分知らないため、一般的で主観的な感想におわっておることをお詫します。

——大学の自治・学問の自由の危機が叫ばれているとき——

一九六八・六・二〇

職場における〝人づくり〟

36回 児玉賢雄
青山同窓会新潟市役所支部長

私ども市役所に青山健児約一〇〇名がそれぞれ市政の一端をになっております。

大先輩、渡辺市長をトップに、議会では村山議長ほか、一〇名の議員先生、その他部長、課長ならびに中堅職員として、それぞれの持ち味を生かしながら活躍しております。不肖私が市の支部長の席をけがしております。支部長何か書けということで、ペンの赴くままに書きました。

職場も練成の道場である

〝人づくり〟どこかで聞いたことのある言葉である。よく考えてみると池田元首相の提唱された言葉である。

国のあらゆる場所で人間をみがこうというのである。つまり国をよくすること、あるいは職場をよくすることは、先づそれを運営する人間がよくなければならないということなのである。

環境が人をつくり、その人達によって環境がつくられるのであるから、職場にはその職場の家風のようなものがあるべきであろう。

今日どの職場でも同様と思うが従業員は年令的に随分まちまちである。戦前と戦後、全く違った土質の中で育ったものがいっしょになっている。世代のズレは、いつの時代にもあるのだが、戦前と戦後の教育が違うのでそこに大きなギャップが見られる。昔の教育には悪い面もあったが良い面もある敗戦によって、古いものはことごとく悪いのだという考え方が横行しているところに問題があるのではなかろうか。たとえば、規律とかいうとすぐ民主主義に反することのように考え違いをしているようだが、こういう点で現在の学校教育が適切な指導を欠いているのではないかと思う。

ある結婚式のひろうの場で来賓として出席された校長先生が、〝どうか親に孝行をして下さい。〟と力を入れて祝辞の中で述べられた。しかも古い考えの様であるが自分の考えは間違っていないと力を入れて付け加えられた。

ちょっとしたことであるが、自分は非常に良いことを言って下さったと思った。

結婚の条件に、土地付き、家付き、カー付き、ババ抜きという合言葉の流行している時代に対象的な言葉であるが、私は校長先生の方に軍配を上げたいと思う。

戦前の教育を受けた世代の者にも反省しなければならない点も多い。ただ、今も昔も変らぬ道理を中心に戦前の教育を受けた者と戦後の教育を受けた者が理解し合うことが出来る筈である。

職場を構成している人間関係は労使の関係と裸になった人間と人間の関係の二つから成り立っている。

職場の〝人づくり〟もその観点から考えなければならない。労使関係を良くするためには、おたがいに姿勢を正し、立場を知り、理解し合って行くというすっきりした路線を引くべきである。

人間関係を良くするには「良い人生観」をもつようにすることだと信じています。

遠山満先生に門下生が先生の人生観を教えて下さいといったところ、僕の人生観は〝何糞！だ〟といわれたそうです。いかなる場合でも頑張り通すという意味だが、わずか二字であるが味のある言である。色紙に〝健康、和、誠〟と書いてあった。これもわずか四字で誰でも簡単に守り行なわれることなのであるが、こんな容易なことを誰も行なっていないところ〝ままならぬ〟とあきらめるのも忽体無いではありませんか。

断じて行なえ

「断じて行なう」という程強い意志を持って事に当るとき、たとえそれが困難と思えるものでもその気根の前には道はおのずと切り開かれるものである。

我々一人一人がこの様な強い意志を持ち謙虚な気持ちで事に処してゆくならば、職場は活気にあふれ、そこから職場と職員の繁栄がもたらされると確信いたします。

言うこと多く行なうこと少ない今日の社会にあって、今一度果断実行について考え様ではありませんか。

総会へ多数のご出席を

年二回の同窓会総会のご案内状はできるだけ広く発送させていただいておるつもりですが、まだご連絡もれも多々あろうかと存じますぜひ、お知り合いの同窓の方へ総会開催をお伝え下さいますよう、おねがい申しあげます。そし市内在住の会員諸兄姉、ぜひ誘い合せておでかけ下さい。各方面より寄贈のビール、その他がお待ちして居りますし、多数出席のクラス会にはそれぞれ賞も用意してあります。

江口君と交友六十年の回顧

21回　鹿野　愈
新潟県長寿会会長

江口君を知ったのは県立新潟中学一年の時からである。同君はたしか大畑校出身私は礎校共に新潟高等小学校を経て入学したのであるが高小時代は組も異って知るよしもなかった。一年の終りの学年試験期に事件が起きた。昼休みの時から少しおかしな気配を感じ乍ら午後の授業が半ば進んだ頃、何処とも知れず人の叫び声が一同を驚かした。「火事だ」と云う声だ総立ちとなって「何処だ何処だ」とわめき乍ら廊下へ走り出た左手の生徒の入口の方から煙が見えるすわ生徒控室の火災だとわかった時昼休みの時の気になる光景が一瞬脳裡をかすめたが兎も角水だと気付き教室に取って返しバケツを持って近くの水溜りにとび込み汲んではかけ汲んでは消火に努めている中常備消防がかけつけ他の建物への延焼を喰い止め午後二時半鎮火した。此消火作業で泥にまみれ煤煙と水で黒い雫をたらし乍ら互に顔を見合せてニット笑った江口君と私は何か言葉で云い表わし難い親しさを感じ合ったものである。此火災はそれ丈では終らず別な生き物の如く燻り続け段々火勢をつのらせて行った。その頃の校風には大変純真で明るい正義感と質実剛健の気性に満ち青陵健児の名を内外に認められていた半面落第生が巾をきかせ悪るくするとボスの存在を許す傾向にあった。今の学生運動のような暴力やイデオロギー的権力に対する反抗と云った内容は持たない時代ではあったが勉強を軽視し授業の円滑を妨げ空転を喜ぶ風があってやゝもすれば校長の方針や行動を批判し嵩じては多数を語って反抗の気勢を揚げやすい気質を醸成していた様であった。その行為は極めて無邪気な形で表れる。たとえば蛇と蛙と蛞蝓を先生の机の引出しに入れて置いて先生の驚くのを横手を打って嬉しがる事やその外諸々の悪戯をしたものだった。丁度火災の後で新潟師範から火事見舞として数百の餡パンが届けられた私達通学生は知らなかったのであるが、いつもの様に私は江口君の西堀六の石油店（その頃江口君の父君は永年勤めた秣川岸一の倉久石油店から暖簾を分け与えられ立派な石油小売店を開業）を訪ね一緒に登校して驚いた火事の後とは云い異状の空気を感じた。教員室の前を走り過ぎ乍ら数人宛が一組となって「パンパン餡パン」と怒鳴り乍ら此方から彼方、彼方から此方と馳け抜けるのであるが、やがて時間が始まっても教室に入らず、異口同音に、「パンパン餡パン」と連呼して喧騒を極め授業処でないのである。見舞に貰った餡パンを学校関係者丈で処分した事に端を発し附和雷同の茶目気が手伝って火の手は次第に大きくなる許り、校長も捨てゝ置けず急拠職員会議を開き協議の結果寄宿生が原因を撤いた事がわかり四年三年の某々数氏が謹慎戒告の処分を受けるに至って益々本物となっていった。処分を受けた四年三年がきかない。直ちに処分を撤回して謝罪しろと要求をつきつけ若し要求が入れられなければ全校ストに入ると告げたが勿論物別れとなり四年生の指令のまゝに同盟休校に入ってしまった。当時は上級生の最も威信のあった頃で一年に一度か二度必ず慨嘆演説集会が行われ青山の気骨稜々たる士風を謳歌し惰弱なる風潮を一掃せんとして行われたもので特に女学生との関係に於て時々袋たゝきの刑に処せらるゝ姿を見て下級生は震いが止まらなかったものである。私共が五年生になってからは此様な制裁は廃止する事にしたが当時は威令行われた時代であった。我々一年生は誰が何時引卒したでもなく互に相引いて裏山の砂地の凹地に集結し二三の弁の立つ奴が不平や不満をかき立て同盟休校を理論つけようと熱弁を振い皆の賛成の元で団結を誓う意味で血判連署する事にきまって皆で連署血判に指を切ったものである同輩の中でその頃新潟中学で英語の先生の長男赤井貞一君が居たが青い顔を一層曇らせどうしても血判の中に入らない、江口君と私は皆に謀って血判に入らなくともよい事にした。現今の学生諸君から見たら詰らない贈り物からよくも同盟休校迄発展した物だと笑われるに異いないが真実心から悲愴がったり憤慨したり血判で同志の誓いをかわした事に一種の誇りすら感じたものであるが実は少年時代の淡い英雄崇拝教育の夢の一駒でもあったかも知れぬ。此騒動も父兄会や先輩の奔走で処分は撤回せられ三日後には平常に復しやっと平和が蘇った私は祖母に可愛がられて育った者だから婆子は三文安で水泳は身につかずそこえ行くと江口君は達人の域に達していて同輩友人の中でも信頼を穫ち得ていた。夏になると青山水泳部の行事が始まり終始私等は世話を焼かせた方である。然し相撲とボートの方は私の方が少しはましであった今思い出しても楽しかったボート部の思い出、何物にも押さえられぬ天衣無縫の開放感、春は春　オール持つ手に花が散ると歌った青春の輝く月日の思い出は老いてますます私の血を若返らせるものがある相撲部の大滝君安藤寿雄勝楽寺様江口君水泳部の中野君赤井貞一君江口君山添君ボート部の広川忍君神井君斉藤君等今も健在の誰彼が懐しい。その一番親しく往来した江口君は四三年四月他界して今は相見る事の出来ぬのが一層身に応えて悲しい次第である。丁度二年の秋だと思うがいつも登下校を共にした江口君を迎えに行くと大変ふさぎ込んで何を話しかけても生返事で気になったが深くも訊すわけも出来ず静かに時のたつにまかせたが二三日してお父さんの顔が見えない事に気付き色々尋ねた処事情あって東京へ別居したとの事、学業の事も心配になったが私の力でどうにもなるわけもないので余り立ち入らぬ事にしたがそれからの江口君は一層無口になった様である。学資を得る為もあって間もなく牛乳配達を始めたそこで私もおせっかいとも思はれたが登校を三十分早めて一緒に牛乳配達を手伝う事としたがそれがどの位続いたかは忘れてしまった。明治四十五年は、明治天皇崩御の忘れ得ぬ年である。特に江口君を思う時此年は永久に忘れ難い思い出を持続するであろう。大帝崩御は全国民を悲嘆の極に落し九月十三日御大葬の日を迎え、我々全校生徒も校庭に整列して御霊柩の宮城御出輩の時を待ったその時が来た兵式教官の脳天より迸る様な「気をつけ」…捧げ銃の号令と共に喇叭手の哀の曲が吹奏され始めた。何と云う緊張の一瞬であろう、物は何も見えない暗闇の中に只哀れに響く喇叭の音、遂に終って萬象寂として声なく涙が自ら頬を伝うのみ、やがて緊張は解かれ静かに解散帰路についた。相変らず私は江口君と一緒に西堀を下るつもりであった処、白山神社迄来ると社殿の方に足を運ぶ江口君につれて私も参拝して御冥福を祈ったのであるが江口君は拝殿の横に腰を据えて動かない、聞けば今夜は徹夜して、大帝の御霊柩をお送りすると云う。私も一議なく賛成しその忠誠に感激したものの無断で夜明迄と云う訳にはいかないので一旦父の承諾の上でと家に取って帰り又白山に江口君と共に終夜祈念を捧げて暁に及んだ。

夜が白みかけて一番最初に参拝された町の紳士は誰あろう江口君の父君が永く勤めた倉久油店の主人であった。此倉田久蔵氏は明治の末年自費で欧米を漫遊した程の開化人で私の父とも親しかった人である。江口君の不言実行の行為は永く私の師表として今日に及んでいる。その年の十月と云うから大正元年の十月になる、中馬校長が長沢前校長に代って赴任して来た全校生徒を講堂に集め新校長中馬を長沢校長が紹介して下ると、いきなり中馬校長はステージからテーブルの上に飛び上ってしまって大声一番、気をつけの号令である見ると前校長が紹介した通り陸軍大学出の陸軍中尉丈あってチャント軍服軍帽軍刀姿である。次に、坐れときた。一同板の間に坐ると此度は休めである。モジモジしていると自らドスンと大安座　である。皆ドット笑い乍ら安座にすると何がおかしいと大喝である。それから訓辞だ。茶目気たっぷりの気かん棒もド肝を抜かれた形で誠に温和しい。それから毎日各クラスに一週一時間位を自ら受持って廻られたが別段記憶に止まる話しも無かったが只英語は勉強せんでもよい外国語の出来る奴に愛国者はいない等と放言した事を覚えている。特に私等は英語が一番の苦手ときているから大に我意を得た気で一層不勉強になったのはたしかであった。処がその翌年の四月に、新発田中学の遠征を迎えて野球の試合があったが不幸にも我々は惜敗した。別に敗けたのが原因とは思わないが新発田の選手の挨拶が如何にも人を馬鹿にした言い方に腹を立てた応援団の一人が喰ってかかったのが原因で大乱闘となり見ていた二百五十人が一勢に新発田選手を包囲し殴る蹴るの大騒ぎ、私のクラスの中村一男等は履物の緒が切れる程の活躍振りに思わず苦い顔をせざるを得なかった。誰が知らせたかはわからんが中馬校長はおっ取り刀で飛び込みざま刀を抜いて止まれやめろと大声叱呼しつゝ洋刀を打ち振り打ち振り乱闘の中を縦横にかけめぐり声をからして制止のかいあって騒ぎは静かになり新発田選手は一応教員室に逃げ込んだのであるが、校長の洋刀が一人の生徒私の組の原田某の頭にあたり相当の出血を見た乱暴組は方向を転じて校長に襲いかゝって来た。校長も初めて自分が興奮の余り鞘ぐるみ持っていた積りの洋剣が抜刀していたのに気付くと共に機敏な動作でスット校長室に引揚げてしまった。二年の長谷川龍雄氏等はその後を追って校長室の戸を押し開け様とするが中から錠をかけて音を殺している有様に一同を雨天体操場に集め上級生が代る代る演説し校長の謝罪を求めて轟々たる騒ぎ、代表が校長に面談しやっと校長を引出し釈明せしめたが中には校長に飛びつきそうな勢に恐れを為して退散したので、上級生も我々も自ら反省する処あり穏かに事を収める事が出来たが間もなく中馬校長は出形中学に転出する事となった。我々四年生は一年時代から一番きかん坊組とされ中馬校長赴任後国語の田村先生が受持主任教諭ときまる時校長の指示が面白い「君の受持つ一年甲組は全校一の暴れん坊組だ此組を牛耳る事は全校生徒を牛耳る事だ」といったと云う。然し時々茶目気をはづして無茶はやるが又一倍純情可憐な処もあって田村先生には愛された組であった従って中馬校長にも愛情を感じていたものが多く、一同相談して送別の会を行ふ事として下級生にも参加を呼びかけた処講堂が一杯になる位の盛況振りであった。笹川久吾氏（後の京都帝大の教授）や安藤勝楽寺和尚や金子義晃医博竹原公平氏等が交々雄弁と真実を披瀝して先生を愛惜した。一年下の師尾源蔵君が丈余の巻き紙に先生を惜しむ衷情を陳べて萬堂の共感を呼んだ後に江口文助君がやおら壇上に立って中馬校長に最敬礼し聴衆の方を向いたから何か云うであろうと希待した一同に又最敬礼して静かに壇を下って自席に戻った。一同しばしのまれた形であったが笑いと共に割れる様な拍手に変った。その後で感慨深い中馬校長の挨拶があって会は終った。今でもその時の江口君の姿が目に浮んでくる。白山社頭の祈りと共に忘れ難い思い出はいつも生き活きと私に話しかけて来るのである。それから私共は校門から下手に道をはさんで両側に並んで校長の下降を待ったのであるが、中馬校長の此別離も亦永久に忘れ難い印象を残した。即ち平素着慣た軍服に長靴を履き白馬に跨がり、一旦校門に立って敬礼し一同にも挙手の礼を為し静かに走り出しやがて一鞭して県庁方向に駆け去った姿は手袋の白さと共にいつ迄も瞼に残るものとなった。昔札幌北大初代の校長クラーク博士も任満ちて去るに当り、白馬に跨って校門を去り乍ら見送りの生徒達にビーアンビシャス、ビーゼントルマンと明言を残して去った。今中馬校長はその様な気障な言葉は無く共より以上無限の言葉を投げかけていると思った。江口君の音無しの惜別の姿と共に私はいつも中馬校長の思い多き別離の姿を人生の教訓として大切に胸中に残して置きたいと思う。

ありし日の江口文助君

江口君は新潟中学を卒業する頃大分悩んでいたようだった。それは母堂の念願であった小学教師になれと云う事である。同君はいつも私に将来は電気関係の仕事をと念じていたからである。然し中学卒業迄御母堂はよく働かれ学資に事欠かせぬ努力をされた事から江口君も遂に新潟師範二部へ入学した。卒業後は学校の義務指定地で二年の教員生活が待っていた。その赴任地は加茂町の狭口小学校であった此二年間は母への御恩報じで月給も母への仕送りときめて励行された。二年が済むと約束通り上京して東京電気学校本科に席を置いて苦学力行大正七年無事卒業し蔵前専修工業電気科に入学昼は工場に勤め夜は大学に通う苦学が一層激しさを増していった。丁度その頃私は父の供をして上京した機会に江口君を訪門しようと中食頃から尋ね歩いて夜の八時過ぎ牛込の細小路に君を尋ね当て手を取り合って喜んだ事を思い出すその頃は父君と一緒であった。父君は再起ならずして陋巷に果てられやがて遺骨を持って江口君は帰宅母堂と再び一家の暮しが始まるのである。父母の不仲と経済的窮状にもめげずよく自己を堅持された許りか母の乞を入れて師範から教師と小言一つ云わず黙々と我道を歩き、やがて亦東京の父君の側に立って孝養を尽し不遇の父の最後を見とり乍ら遂に初一念を貫徹して電気工学の奥を極め大正十二年東北電気新潟店屋内配線課に入社良妻を得て平和な生活に暫しの愉楽を母堂と共に楽しまれたが下越変電所遍歴の任につかるゝや亀田見附、新津、と席温る暇無き日が続いた。然し此間にあって一男三女を挙げられ立派に育成されつゝあったのである。数年後又本社に戻られ戦後膨湃として起った組合運動に最も温健中正の思想を以て東北電力労動組合の結成に尽され初代組合長に押されたのも江口君の人柄を語るものと云うべきであろう。かくして江口君にも停年が来た。何人にも愛され惜しまれ乍ら昭和廿五年円満退職された。実に電気会社に入られてから二十八年の在職であった。長男良助君は実によく出来た青年で学問も優秀で父の素志を体して電気に志し大学卒業を目前に控えていた。江口君は良助君の卒業を待って電気工事の会社を起し西大畑の住所に産声を揚げ続いて二十九年現在地に株式会社江口電業の大看板を上げ使用人も五十人を数えるに至った丁度その翌年があの新潟大火である。一千余戸の焼失、一日も速かなる復興、利益を度外した江口電業総力戦の上げ潮は一層市民の喝采と信頼を拍し社運はとみに隆昌を極めるに至った。惜しむらくは御母堂は先年昭和廿六年四月八十余才を一期に此世を去られ今は亡き事である。良助君の奮闘はより良縁となって表れた。昭和卅七年実に盛大な結婚式がイタリア軒で挙行せられ被露宴に招かれた客人二百を以て数えられた。以て江口電業の成功を嘉すに足るであろう然し人生好事魔多しのたとえの通りこれから少しは楽も出来ようかと思われた江口君及奥さんの上に病魔の影がさし始め、江口君が先づ入院加療中奥さんが倒れてしまい医大からかけつけたが遂に間に合わなかったと云う悲しい永別離苦の有様であった。それは四十年十一月の事である。一時よくなって仕事にも気を入れ始めた江口君も又亦入院加療のやむなきに至り見舞に行った時は割に元気に見受けられたがその後多忙のまゝに失礼していた処、今年の四月帰らぬ客となってしまわれた。兄弟よりも親しく心の友として信頼し合った江口君、私より達者に見えた君の霊前で弔辞を読まんとは思っても見なかった私が今君の思い出を綴りながら夜明けの光りが障子にさし初めて来た。君よ安かれ、君の遺鉢が君の良き相続人によって受け継がれ益々繁栄を加えられんことを

悪文を多謝して擱筆する。

良助君夫妻

会費納入を

会費納入をお願いする季節となりました。ご請求もれもあろうかと思われますので、ぜひ多数・ご納入下さいますよう、財源を会費納入のみに頼る事務局といたしましては心からお待ち申しております

若い会員へおねがい

ごく若い会員の方々で大学卒業後住所変更や就職先決定等の異動がありましたら事務局までお知らせおき下さい。若い方々で名簿の上から蒸発してしまわれる方々の多いご時世ですので、何分よろしくおねがいいたします。

中村慎一郎君

64回（高7回）　小林光衛　新潟中央高校教諭

君は山に生き山に逝きました。あれほどに熱愛してやまぬアルプスの嶺で、盛りを前の青春を散り失せました。山にひたむきな情熱を傾け、山を良く知っていた君が、私達の敬愛を集めていた君が忽然として逝いたとは全く茫然自失するばかりです。

私が悲しい知らせを聞いたのは五月一日夕刻でした。小生宅に、旅装の飯塚良彦先生が石田瑞穂君（67回）と共に来られ、君が北アルプス鹿島槍で遭難したらしいとの事。いきなり頭を殴りつけられたような気がしました。飯塚・片岡の両先生は六時五十分の急行で大町にむかわれました。見送ったあと、君のお宅を訪いました。御家族は四時過ぎに大町にむかわれた由。落ち着かない一夜でした。しかし、二日朝、飯塚先生からの報せは「一日朝六時五分、鹿島槍天狗尾根からマガリ沢に転落、死亡。遺体の収容は、一ツ橋大学山岳部とO・Bが三日朝からあたる」という決定的なものでした。

私達O・Bも三名（小林石田村山）とり敢えず五月晴れの二日午後、大町にむかいました。信濃路はリンゴの花が満開でした。夕刻七時鹿島槍の麓、鹿島部落で、御家族に、飯塚片岡の両先生に、一ツ橋大の関係者にあいました。もうあたりは真っ暗でした。御家族と一ツ橋の人達とお会いしたのはこの時が初めてでした。小柄なお母さん、君の体軀を彷彿とさせるお父さん、美しい姉さん。でも、もうずっと以前からお会いしているような気持でした。それは君が、私達山仲間とのあらゆることをいつも家族の方々に話していたからなのでしょう。君の今の山仲間、一ツ橋の人達は全く素晴らしい山男です。古いO・Bの山岳部長の関先生アンデス遠征隊の甘利・中島の両氏。静かに、ゆっくりと君の遭難時の状況と、明日三日の君の遺体を山麓におろす作業の予定を話してくれました。そしてこの夜、は君の悲報を聞いた仲間達がこの山麓の小さな部落に続々と集まって来ました。東京から　名古屋から新潟から、槍ケ岳から。夜十時十一時迄。汽車で、車で。

三日朝、総数四十名は君の眠っている鹿島槍にむかいました。私達新高の関係者は七時、朝露の中を出発しました。空は奇麗に晴れあがっていました。あの鹿島の河原から眺めた鹿島槍は、大きくどっしりとしていました。沢身を離れ、天狗尾根を登りはじめると、固く氷った残雪の間から、春を待ちかねたカタクリの花が顔をのぞかせていました。

十時四十分、尾根の中復樺平で君に会いましたね。君と、駆け寄った弟の茂君を囲む十五名の一ツ橋の仲間達の姿は厳粛でした。悲しみ、悔恨にも似た顔。とりわけ主将であり、今度の山行のリーダーであった俵君の顔は印象深かった。黒く、やつれて――。頬には涙がわき出る汗と一緒になって白く光っていました。彼はもう一人の仲間と、私達を遭難現場に案内してくれました。樺平から十五分位登った処でした。茂君は君のスリップの跡が、まだ白く残り細く高くのびるルンゼを喰い入るように眺め入っていました。あの時の彼の思いは知る由もありません。しかし「なぜ死んだんだ、兄貴―」と怒鳴っているように見えました。私達も、改めて君の亡くなったことを強く感じました。言葉も無く重い足どりでもうゆるみ出した雪の尾根を下りました。遠くには今度君がたどった遠見尾根がゆるく長く続いていました。

沢の出合いでは、姉さん、大西昇君、それに君の高校時代の山の仲間達が待っていましたね。更に一時間半、丁度一時半に鹿島槍を遠くに望む河原で御両親が君を待っておられました。お母さんは君の姿を見つけると、転がるように駆けつけられた。「慎ちゃん、慎ちゃん」と小さく鋭く叫ばれた。真っ白な足袋と、濃い羽織の紐が鮮やかに光っていました。お父さんはゆっくりと、しかし、もどかしそうに君を強く抱かれました。あの温容で、口ごもるように「慎一郎」とだけいわれた。悲しみのためでしょう、時折よろめかれる道路に出、君が車に乗った時の歌声、聞いてくれましたね。一ツ橋の、新高の仲間達が校歌を、山の歌と共に歌う声を……。

葬儀の前夜、香華の中で君の愛した仲間達、君を愛した人達と語り合いました。悲しみは一層つのるばかりでした。小学校時代の恩師相馬先生のお話は、君の人となりを思い起こさせました。秀才の誉れ高かった君。腕白で、暴れるときは先頭だった。いつもグループの先頭に立って、友人の喜びを君の喜びとし、悲しみをわかちあった。あらゆる事に群を抜いて優れていたそうですね。先生にはヒマラヤへの夢と希望をいつも話していたそうですね。

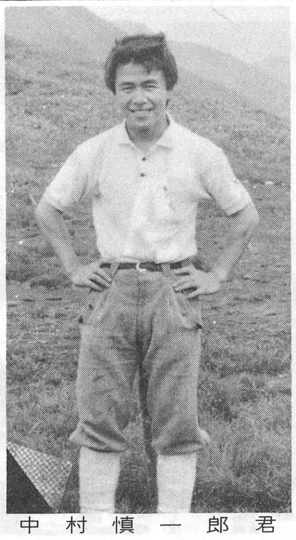
私が君に接したのは高校に入ってからです。体は小さかった。でも、あの濃い眉と引き締まった口許、いつもにこにことして接する者に安心感を与える容貌。僕は本当に君が好きだった。礼に篤かった。責任感にあふれ、闘志をみなぎらせた君に、後輩は尊敬と畏怖の念を抱いていた。彼等に、君はやさしく厳しかった。二王子岳の合宿では先頭に立ってラッセルしましたね。君の囲りには何時も笑いが絶えなかった。一ツ橋合格を知らせてくれた時の笑顔は忘れることが出来ない。昨年のO・Bの山の映画会の折は、入学早々の学校を休んで駆けまわってくれましたね。あの会は、君がほとんどやってくれたも同然だった。終えたあと、学校町のソバ屋の二階での慰労会では痛飲しましたね。飲み足りなくて私の家にゆき、朝まで飲みあかしましたね。

君の学問に打ち込む姿は立派だった。大学での君の最後となったドイツ語の時間、君が次の週の訳を割り当てられた時

「来週は山にゆくので欠席します再来週やります。」

と先生にいったとか。関恒義教授の出版されたばかりの著書が、もう本棚にあってシオリをはさんでおいたそうですね。真摯にして充実した学生生活でした。

昨年五月十四日「母の日」のことを覚えていますね。あの電報のことを。「ハハノヒオメデトウ　カアサンイツマデモオゲンキデ　シンイチロウ」　君は本当に良い息子だった。御一家のアイドルだった。



中村慎一郎君

中村君―君は死んではならなかった。これを書いている今、改めてこういう気が強くいたします。御両親は私達以上にこの気持を抱いておられますよ。

山登りは危険です。一瞬の偶然が生命に関るスポーツです。それ程の危険があるのに「何故山に登るのか」と世の人は問います。山で死ぬのは愚かだといいます。なるほど、登山は一見愚かな行為に見えるかも知れません。何らの社会的な価値はないのですから。しかし、一見愚かに見える登山という行為は、山に登る特定の個人にとっては何物にも換え難い大きな価値を持っています。そして真面目な登山者はかりそめにも山で生命を失くしても良いなどとは口にしません。しかし、山に親しむことが深ければ深いほど人は造化の偉大さ神秘さとともに、人の力の限度を知ります。そして山と取り組む時の真剣さを増してゆきます。

大島亮吉が書いています。

『その時だった。ひとりが考えつかれたかのように、自分達の前にひとつの問いを投げだした。

「おい、山で死ぬっていうことを君達はどう思ってるかい。」

自分達はみんな同じような気持で同じことを考えていて、誰れかが話の緒口をきるのを待遠しく思っていたかのようにみえた。そこへこの言葉が落ちて来たんだ。勿論それはこだました。全く先刻から自分達お互いの心はお互いにこの高い山の上の、しかも暗い中で、自分達のなかからその大切な仲間をいつ、誰かもわからずに、失わしめようとしているこの山での不幸なゲファーレンというものについて、結局は自分達自らさえも山で死ぬかも知れぬということについて、新しい信仰をうち建てるようにと言ひなやんでいたのだった。

ひとりがそれに対してすぐに答えていった。―

「それは山へなんか登ろうって奴の当然出っくわす運命さ。」

「うん、そうか、それじゃあ山へ登ろうって奴はみんなその運命にいつか出っくわすんだね。」

「そうじゃあないよ。みんなとはかぎりゃしないさ。運のいい奴はそれにであわなくってすんじまうよ。それから山へ登る奴だってそんな運命なんかに全然あわないように登ってる奴もあるもの。」

「じゃあそのあうような奴っていうのはどんな奴さ。」―と。

君の、今度の遭難は、どう考えても運命がこのように動いていったのだという以外にはいい表わしようがありません。あの明晰な頭脳、がっちりした体軀、そして傑出した精神と技術を考える時、全く天運といわざるを得ません。とはいえ、大切な山の友を失なった私達の悲しみの心は到底いやすことの出来ない深手です。

君はもう私達と世界を異にしています。君の声を聞くことは出来ません。しかし君が、私達の前に実現した数々のことは強く生きております。

長いとはいえない、しかし価値のある生涯から数々のことを学びとるでしょう。

中村君

どうか安らかにねむりたまえ。

中村の思い出

75回（高19回）　小柳幹夫　多摩美術大学在学

五月二日午後四時、突然電話がかかってきた。中村が山で遭難し死んだとの知らせだった。あまりにも予期せぬ知らせのため一瞬信じられなかった。がすぐに『あいつめ、ついにやりおったか。』という気がした。というのは常日頃のあいつ（この際親愛の意味をこめてあえてこう呼ばせてもらう）の行動山に限らずを見ていると、何かどこかでポキッと折れそうな気がいつもしていたからである。妥協を許さない、どこまでも人にも自分にもきびしい彼のやり方を見ていて、いつもこう言ったものだ

「おまえはどうもむりに自分を押し通そうとするが、どこかでポキッと折れそうな気がする。」

がしかし彼はいつもあの独特のにが笑いをするだけだった。

電話を切って、とにかくあせってはいけないおちつくんだと自分に言い聞かせ、室にもどり、さっそく新聞を見る。

『五月一日午後一時二十分、大町署に入った連絡によると、一橋大学一年中村慎一郎君は午前六時北アルプス鹿島槍天狗尾根よりマガリ沢に落ち即死』

やっぱり本当なのか……。

さっそく東京にいる新高山岳部OB連中に知っている限り電話をかけてみたが、だれにも連絡がつかない。せめてNだけには連絡したかったが遂にあきらめ、次の朝ことづけをたのみ一人新宿へかけつけ、三日四時三十分発松本行第四アルプスに乗りこんだ。どうかだびに付すまでにはまにあいますようにといのりながら。

大町六角堂に着くと、十人あまりの山男達が焚き火をかこみながら歌を歌っているところだった。何か厳粛な気持ちで堂の中へはいると、BさんとTさんが目をまっかに泣きはらしているのが目にはいった。

「あ、小柳さんですよ、あの人が小柳さんですよ。」

という中村のお母さんの声がした。みると少しばかり興奮し少しやつれてみえるが、いつもの中村のお母さんの姿が目にはいった。隣りにはおなじくお父さんの姿が。

さっそく焼香をすませ、遺体に対面させてもらった。すでに顔は充血していて、中村のおもかげはあまり感ぜられなかった。

お通夜の雰囲気は実にあかるいものだった。出来るだけ冷静になろう〳〵としてきたせいか、それほど興奮はしなかった。涙さえ出なかった。かなしいというよりもむしろおこりたい気持だった。もんくをいいたかった。バカヤロウと叫びたかった。『なんで死んでしまったんだ。本当にバカなやつだ。』と……

その夜、彼の幼な友達や家族の人及び新高山岳部OB連中とこんな話しをした。

「たった一週間前、新宿で飲みあった時が最後になってしまったけど、あの時はあんなに楽しそうに話していたのに…」。

「そうだなあ、いつもはさっぱりしゃべらないくせに、酒を飲ませるとすぐペラペラとしゃべり出すんだ。」

「どんなことを話していましたか。」

「なんでも津田塾との合ハイで知りあった女の子がどうのこうのとか、三派革マル系全学連がどうのとか、まあいつもの話題ですよ

「そうですか、そんなことを言ってましたか。」

次の朝、K君O君TK君の三人がかけつけた。K君は着くやいなや、むせび泣き出した。声を殺そうとむせびながら。むりもないことだと思った。まさにあいつは中村の女房役のようなものだったのだから、必ずといってよいほど中村のいく山行にはついていった。

県高の合宿にて（中央が中村君）

火葬場へみんなで柩（ひつぎ）を運んだあと、昼までユースホテルで休むことになった。そこで中村のいとこにあたるというおじさんとK君、それに中村の下宿のおばさんや同じ下宿に住んでいたOさんなどを交えて、高校時代の思い出や中村のことについて話しがはずんだ。

「おまえはよく中村についていったよ、中村も喜んでいたよ。」

「その点おまえはひきょうだ、あとからになると全然ついてこなかったじゃないか。」

「そうだそれは認めるよ、しかし俺だって苦しかったんだぞ、本当はやめるべきだったかも知れない。それで中村に一応相談したんだ。その時中村はこういったよ。『そういうやつだっていたっていいじゃないか。』ってね。中村はやはり理解していてくれたと思う。」

「あいつは好かれるやつにはものすごく好かれるけど、どちらかというとあいつを本当に理解していたやつは少なかったのではないかと思う。たいてい彼のきびしい妥協のない、時には人をゆるさない態度についていけない人が多かったように思う。」

「つきあえばつきあうほど味が出てくるという感じだった」

「今更どうにもならないが、確かにあいつとはもっとつきあっていきたかった。」

「それから彼は表面に現わさないけれど、非常にさびしがりやだったのじゃなかったかと思うんだけれど。」

「それは確かにそうだと思った俺なんかも結局は彼のことはよくわからなかったもんな。人にほんとうの自分というものをあまりみせなかったし、酔った時でさえ自分の弱みなどは絶対にいわなかった。お互いに信頼しあっていたことは確かだったけど、お互いの中に入っていくことはしなかった。」

「俺は中村との最後の山行は去年の夏の合宿になってしまったけれど、あれが一番印象に残っているなあ。」

「俺はこんど五月頃五頭山へいったんだ、あの時星由利子に似ている美人がいて中村のやつすっかりほれこんでしまって。」

「とにかくあいつは山では抜群だったもんね。絶対バテなかったし。ところが一つトレーニングのマラソンだけは弱かったね。」

「それからトレーニングをしてた時新商の連中とけんかをした事があったんだけど、あいつだけは負けずに言いかえしたけれども、あの時はたよりになるとつくづく思った。」

「勉強の方はさっぱりしていないように見えたけど実によくできたもんねえ、やっぱり頭がよかったんだ。要領もいいし。とにかく英語の歌なんてよく覚えちゃうし、服装とか山の道具なんていつもかっこよかったもんね。やっぱり現代っ子だったのかな。」

こんな話しをしているうちにいつのまにか寝てしまった。

「さあ行くぞ」という声で目が覚めた。まだ酔いがとれなくてふらふらだ。そのまま車にのりこむすると急に中村のことが思い出された。特にあの最後の新宿でわかれた時の笑顔がくっきりと頭に浮かんだ。そして次から次へとあいつとのことが思い出され、まわりどうろうのように現われては消え消えては現われるのだった。知らぬまに涙があふれてくるのをどうすることもできなかった。『バカバカ、なんで死んじまったんだ。』でもおまえはあの時笑っていたっけ、泣いちゃいけないんだなあ。山で死んで幸せだなんてことは俺には言えない。でもおまえの場合見方によっては幸せだったと言えるかも知れない。でもわからない。何を基準にして幸、不幸を決めたらいいのだ。でもこれだけはいえるのではないか、おまえはほんとはもっと生きていたかったんだと、いや生きてほしかったんだといいたいのかも知れない。

そんなことを考え続ける俺を乗せて、一路新潟へと向かって車は走り続けた。

中村の死んだ現在、中村という存在が俺にとっていかに、大きなものであったかということが今さらのように思い出される。なぜなら今の俺の行動面に実に大きく影響しているからだ。『こんな場合彼ならどうするか』と常に考えるからだ。生きていた当時よりなおいっそうその感が深い。死んだことによってよりいっそう俺の心の中に、彼はしっかりと友情のきずなをつくり上げたような気がする。

六月十二日

新潟市役所支部総会報告

市役所支部幹事
46回　鶴巻鉄三
青少年補導センター長

市長をはじめとして、三三〇〇人の市役所職員のうち同窓会員は一〇四人を数え、規約第八条により「毎年一回総会を開いて、会務の報告及び諸般の事項を審議する」こととなっている。

去る三月五日、四十二年度総会を東映ホテルにて開催した。名誉支部長渡辺市長（30）ならびに本部から鍵富会長・斎藤幹事長を迎え、顧問である市議会の市川（37）野沢（39）平田（40）高野（45）早福（55）議員と石川教育長（旧職員）の方々をメーンテーブルにお並びねがい、出席会員七十八人は五つのテーブルでグループを囲んだ。

議会の都合で、倉田（33）斎藤（34）山名（34）村山（37）大桃（46）の五議員と公務のため八田監査委員（27）の顧問の方々が欠席されたことは残念であった。

児玉支部長（36）より開会の挨拶があったあと、決算報告つづいて山田会計監査（36）より監査結果報告があり承認。庶務報告をきいたあとに、新役員の選出にはいった。

若林収入役（37）を顧問に推す動議があり、満場一致で推戴することとなり、つづいて支部長など次のとおり選出した。

新支部長　児玉賢雄（36・水道局長）
〃副支部長　村木門吉（37・建設局次長）
〃　高橋英雄（41・衛生部長）
〃会計監査　山田利平次（36・民生部長）
〃　鈴木　弘（38・計画課長）

次に支部長から幹事として、鶴巻（46）佐藤（56）青木（58）丸山（61）遠藤（62）石崎（64）上松（67）の七人全員が再委嘱された。

再選された児玉支部長から改めて挨拶のあと、渡辺名誉支部長より青山健児に期待するとの励ましと鍵富同窓会長より母校の発展と支部の隆昌を祝うことばがのべられ、さらに斎藤幹事長より青陵健児の像の協力について期待をよせられた。

市川顧問の乾杯のおんどで祝宴にはいり、ついで各顧問から次々と激励と思い出が語られた。杯を傾け各テーブルも歓談、マイクを囲んで懐かしい校歌と応援歌を各年度グループ毎に発表……年一回の総会に青山健児の意気まさに天をつき、市役所支部の健在ぶりを示した。

歓は尽きねど、午後九時、斎藤幹事長・児玉支部長の母校と支部の万才を三唱して散会した。

第三五回同期会

＝二月九日於行形亭＝

三年振りの同期会が山田甚吾、風間利吉両君の幹事役で二月九日行形亭で開かれた。集る者三十名出席状況が心配されていたが、久々の会であり会場の良さも手伝って予想以上の参会者があったことは同期会の力強さを感じさせる。

山田氏のお世話で新潟米穀女子社員の豪華な衣装を着けた民謡踊りの数々を見せていただいたことは素晴しい贈り物であった。

芸妓そんの酒間幹旋よろしく五十路を半ば過ぎてそれぞれに活躍出来る幸せを語り合って話は尽きない。

しばらく消息がわからず幽界の人と思われていた須藤君が、昔のイメージを打破する堂々たる体躯で出席されて列席者の歓呼を浴びた

会合がスムースに開かれるように常任幹事を置くことにして、小山久一、西村六平、沢山厳の三氏がその任に当ることになった。

次会にはより多数の出席を得て会の盛り上りを計りたいものである。

第六十回新年会

約七十名参集

六〇回卒業生約七十名、恩師沢山、渡辺秀英、岩野、阿部正、菅原、関口、大橋各先生が集まり新年会を催した。各界で中堅として活躍する諸氏が、恩師を囲こんでなごやかに談笑すること二時間半七名もの恩師が出席くださったことに感激し、胴上げをしようとの提案もあったが、御老体諸氏の骨を気づかって、ひそかにとりやめる一幕もあった。新潟高校六年間在籍組のかってのいたづらっ子達の中にも課長、係長クラスが多くなって来た。その顔もそろそろ、あどけなさがなくなってきたのは恩師の方々は、なんとみられたことか。六〇回卒の今後の発展が大いに期待できる一夜であった。

（上杉記）

軍鶏と十円紙幣

44回　水野清之助
国民金融公庫

軍鶏―斉藤栄治先生のことについては既に度々発刊された校友誌上を通じ多くの先輩が幾度か語られて来たが、その何れもが蓄声怒号に終始した軍鶏の姿であったように記憶している。

私は軍鶏についてその反面に接する機会をもったことがあり、軍鶏が決して生徒に恐れられた軍国主義的な面のみをもった人間ではなかったとゆうことを申し上げたい昭和一〇年八月私共水泳部は秋田市に於ける東北地区中等学校水上競技大会に軍鶏引率のもとに参加した。当時軍鶏は水泳部の副部長（部長は芝間祐三郎氏）をしていたが、多分に名目的なもので直接の指導はすべて生蕃―鷲尾先生が担当されていた。処が大会の直前鷲尾先生が何かの都合で行けなくなり異例の軍鶏の引率という事態になったと記憶している。

出発当日新潟駅に姿を現した軍鶏は、軍隊ズボンの上に黒い背広色あせて茶色になったパナマ帽というでたちで一見田舎の好々爺を思わせるものだった。日頃こわい存在だった軍鶏の引率でもあり初め一同緊張していたが、軍鶏自ら諧謔を交え闊達さ示したので車中から旅館の起居の間は余り気を使うようなことはなかった。

当時の新中水泳部はプール建設後三年目で県内では最強チームでありこの大会には初めての参加ではあったが東北、北海道勢に対し各種目に得点を重ね、最後の八〇〇米リレーに勝って優勝旗が主将鈴木英夫（現防衛大教授）に授与されたとき感極まって万才を叫んでいた軍鶏の姿が印象的であった。恐らく対外試合に生徒を自ら率いたのも初めてであったらしく、まして優勝という栄誉をかちとったことも軍鶏にとって大きな感激だったのだろう。

その晩のことだった勝利の喜びをつゝみきれない軍鶏は吾々を呼んで「オイ今晩はおめでたい、みんなよくやってくれた、コレハほんの俺の志だからカフエーでもバーでも行って飲んで来い」と一〇円紙幣を差出した、一瞬吾々は軍鶏を見つめ、耳をうたぐった。謹厳実直というか理非曲直というか風紀係の軍鶏からこんな言葉が聞かれようとは。然かもその次の言葉がふるっている。

『飲んでもいゝが女郎屋へは行くなよ』

その晩吾々軍鶏の言を忠実に守り優勝の喜びをかみしめたことはいうまでもない。今は亡き軍鶏―斉藤先生の冥福を祈る。

県大会で活躍

県下高校総合体育大会で、次のような戦績を獲得し、日頃勉強々々で追いまくられている青陵健児の意気を発揮した。

○軟式庭球

団体第三位。

平賀・飯塚組が個人第五位に入賞して、全国大会に出場することゝなった。

○フェンシング

高田高校との決勝戦に勝って全国大会に出場する。

○バドミントン

ダブルスで準優勝

○山　岳

二王子登山競技に男子三十一校女子十二校出場して技術を競ったが、本校五人の選手チームは惜しくも全国大会出場二校の中に入ることは出来なかった。

○サッカー

一回戦は与板高校に三対〇で勝ち二回戦に進んだが、長岡工高と〇対〇の引分けとなり抽選で負け不運にも三回戦に進むことが出来なかった。

○ラグビー

前年国体優勝の選手を多く揃えている強豪新潟工高と決勝戦で顔を合わせ惜敗して準優勝の戦績はあっぱれ。

○陸　上

四〇〇mリレー　第二位
一六〇〇mリレー　第六位
一〇〇m丸山敦夫選手第三位
走幅跳　丸山選手第二位
三段跳　山崎健選手第三位
槍投　阿部裕孝選手第二位

総合で第六位の成績を挙げた

○ボート

全国大会予選が津川漕艇場で行われたが、決勝戦で津川高校、南高校の三艇が出場、二年生だけの本校クルーは全員三年生選手を揃えた津川高校クルーと大接戦を演じ、殆ど同着で、惜しくも第二位となったが、広島で行われる全国大会への出場権を得て近年にない戦果を挙げた。

あなたのアイデアを求めます

年二回発行の同窓会報ですので何かと、会員皆様へのお知らせもれとなっているニュースもあろうかと思われます。心にとまりました二ュースや会員の異動、消息を伝える記事や写真などお寄せ下さいます様お待ちしております。早速紙面をかざらせていただきます

又、誠に恐縮とは存じますが、御依頼申し上げました原稿をお早目にお出し下さいます様、重ねてお願いいたします。何分にも未熟なる編集子でございますので案を練る時間をお与え下さいますように……。

尚、紙面構成へのアイデアや希望記事など特に締切りも設けてありませんので、いつでもお寄せ下さい。皆様のご教示でよみやすくて楽しい会報にいたしたく、張切っております。

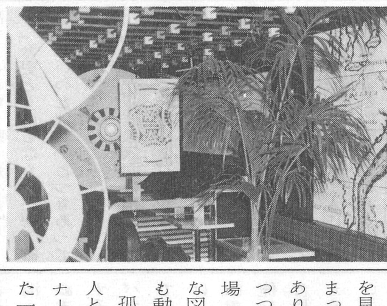
■青陵飲食街(二)　変った店

喫茶店　クリクターの巻

とにかく、一度行ってみることです。そのカラフル（色彩豊かな）ムードに驚きます。従来の地方都市の喫茶店の持つイメージといえば、お熱い仲のアベックを変に甘く包むムードか、非行少年少女の巣となる暗がりムードのいずれか。

古町六番町、喫茶店「白十字」の隣に誕生した「クリクター」は、そのイメージを見事打ち破る、都会的雰囲気を持つ店です。

この店の主、元「コトリヤ」カバン店の御曹子、佐々木城氏（六〇回卒）に御登場願うことにしましょう。



東大農学部卒業後NHKプロデューサーの肩書で「自然のアルバム」、「四つの目」、「科学千一夜」と手がけた佐々木氏は、一身上の都合で去る四十二年八月、NHKを去り新潟に帰ってきました。

「テレビ番組に溺れ、ソコヒになりかけている地方人の眼に、人間本来の視力を写えたい」

科学番組をプロデュースした佐々木氏は、チャンネルの自由に恵まれない地方都市新潟に新鮮なスタジオを設け、地方人の眼に自然な視力を与えたいと願ったのです。その試みは「クリクター」の室内装飾に見事生かされています。

テレビスタジオ張りの照明装置は、店内に無雑作に置かれた大道具、小道具の原色を美しく映えさせ、原色のミニスカートに身をくるんだ新潟美人は原始人の健康美を見せてくれます。旧来の型にはまった喫茶店の雰囲気はどこにもありません。近代都市へと脱皮しつつある新潟市に誕生した憩いの場「クリクター」は、大蛇のような図太さで、何物も飲み込んでも動じない貫録を示しています。

孤独な現代人が、行きずりの他人と時を忘れて議論し合えるコーナー（場）があるかと思えば、また一隅には家族団らんの場をやさしく見守り、特に子供さんをあやしてくれるヌイグルミ人形のあるコーナー。一人静かに仕事の整理をできるビジネスコーナー。小グループの打合せに適する会議室風のコーナー。それに決して冷たく扱ってはならないアベックコーナ等。現代の大衆のあらゆる欲求に応ずる場が、一階から二階へとくねりくねって席をあけて待っています。

コーヒー、紅茶………一〇〇円（ただしデラックスなモーニングサービスのほか、午後五時までは趣向をこらしたおつまみがつく）その他、超特級のアイスクリームや、独特のイギリス風紅茶、ロシヤ風紅茶がこの店の味。

ぜひ一度のぞいてみるようおすすめします。

（上杉記）

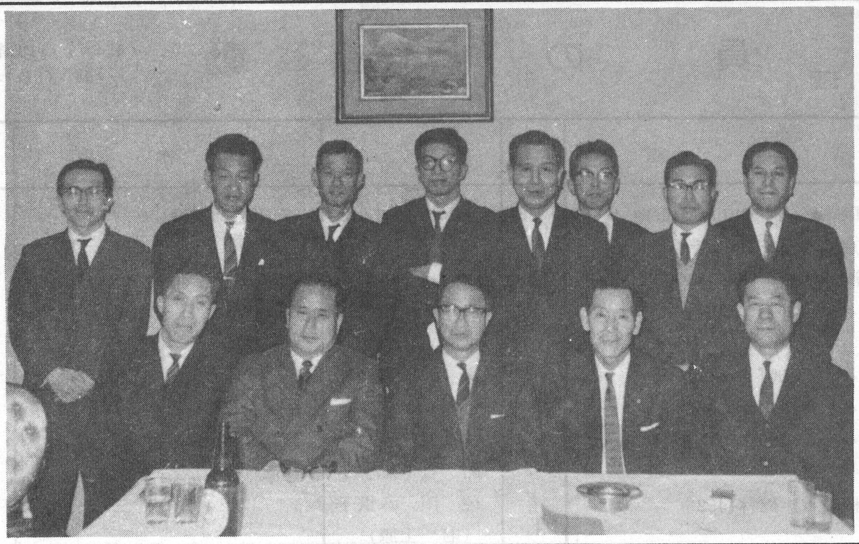
全国各地から参集
青山水友会(関東地区)
次回は水上温泉を予定

二月三日関東地区に散在する会員に呼かけ都内に於てその集会を催した処、遠く群馬から山添三郎氏が駆けつけられた外名古屋茨城埼玉と夫々遠方からご参加下され都内在住の諸兄とあわせ一三人の小人数ではありましたが、中には二〇年、三〇年振りの邂逅の方もあり、互いの健康を祝すと共に昔話に思わず時をすごしました。

山添先輩当時泳いだ日本海から始って臨港プール—関屋堀割—プールと泳いだ時代場所は夫々異ってはおりますが、皆共通の思出をもつだけに、六〇才の山添氏以下何れも不惑を超えてはいたが将に談夜半に及び談尽きざるに酒つくの観を呈しました。

この計画を樹てたとき共に泳ぎご指導をいたゞいた鷲尾先生にもお出いたゞくべくご招待申上げた処残念乍ら所用のため参加できないと電話で大変口惜しがっておられました。

尚全員の発議で今夏山添先輩の地元水上温泉で八月下旬再会を約しておりますので、新潟在住の諸兄より大挙参加を希望いたしております。



写真説明—前列右より河内恭三、立川正博、山添三郎、番場三作、今井亮、後列右より中野慶治、高野喜夫、樫木基、水野清之助、勝又讓、梅田悌次、木村和郎、青山信一の諸氏です。

なつかしいあの頃

62回 田村恭子(本間)
新潟青陵女子短期大学勤務

私たち六十二回生が卒業したのは、昭和二十九年三月、あの火災で校舎が焼失する何週間か前のことでした。以来、何となく行きそびれてしまい、すっかり御無沙汰しております。この度、同窓会報に一筆……ということで、ようやくペンを執りました。

女子が入学するようになって二年目、三百五十人中、わずか十七名の女生徒であった私たちは、三つのクラスに数人ずつ分れて入り、いつも群をなして行動していたような気がします。それが、大学への入学、卒業、就職、結婚などで、すっかり散り散りになってしまい、同じ県内に住んで居るといっても、なかく会うことができず、時たま、電話や年賀状などで消息を伝え合う程度にすぎません。

現在、私にわかっている範囲で皆さんの消息をお伝えしますと、大岡(左右田)貞子、久保(橋本)敦子、碇(小川)玲子、反町(島田)るみ子、貝沼(酒井)由紀、近(平野)綾子、大井(入山)栄子、湊(四十万)一子、藤原(寺島)岑子の皆さんは、結婚して家庭に入っておられます。一方、杉内(金子)愛、本多京子さんは、医師として、脇本(岸田)公子、茂木(高木)敏子、石見(斉藤)勝子さんは教師として、又、山本(植村)真弓さんは雑誌社員として、職場と家庭の両方で、奮斗しておられます。皆さんそれぐく、一人ないし二人の子供をお持ちで母親としても一生県命にやっておられる様子です。御主人の勤務などの関係で、東京、大阪、静岡、仙台、埼玉、新潟に散らばっておりますが、中でも藤原さんは、日本から遠く離れて、東アフリカのタンザニアの首府エス・サラームで家庭をもっておられます。

こうして同期の方々の名前を書いておりますと、おカッパ頭であった高校時代のお顔しか思い浮かべることができません。それと同時に、入学当初、三年生が随分大人びてみえて、こわかったこと、校庭ではだしになって鬼ごっこをしたこと、バレーボールに興じたこと、教壇の上の天井にぶつけられた雪玉が、授業中にしずくになって、ポタく と教卓の上に落ちて来るのを、はらくしながら見ていたこと、運動会、仮装で、インドの曲に合わせて踊ったこと、新校歌ができて、初めて歌った時のことなど、断片的に思い出されます。

当時の私たちにとって、学校は楽しいところでした。勉強もさることながら、学校は良き友人を与えてくれる唯一の場所でした。学校だけでは足りず、暇さえあれば友人の家に訪ねて行き、夜中まで語り合って、泊ってきたりしたものでした。卒業以来、数年に一回位しか会わなくとも、会えば普通り楽しく話し合えるのも、この頃の気持のつながりが、そのまゝ、生きているからのように思われます。何かの機会に、皆で集れたら……と思わずにはいられません。

最後に、斉藤(堀部)格子さんが、昭和三十六年に亡くなられたことをつけ加えなければならないのが、非常に残念です。四十九日に、同級生五名が東京の堀部さん宅に集まりましたが、そこに飾られていたありし日の斉藤さんの明るい笑顔の写真が未だに脳裡に焼きついて離れません。御冥福を御祈り申しあげます。

ロングスカートと旧制中学の校舎

泥まみれの熱と意気
盛大に青陵祭
五月十五日

若き青陵健児の祭典、青陵祭が五月十五日に実施された。今年は残念にも雨天のため一日延期となり、其の上前日の雨の影響で開始が遅れるという不運もあったが、準備に十数日間を費し精魂傾けて創り上げた成果の競技・仮想応援が熱気溢るゝ校庭で開始された。平日にもかゝわらず見物の方々がギッシリと会場を取りまき青陵健児の熱演に拍手の嵐が起る。各連合毎に一・二・三年が融和協力し、勉強に疲れた身体に活力を与え、鳴呼青陵に精気あり、青陵健児こゝにありと意気高らかに有意義な祭典の幕を閉じた。

会員の移動 (43年1月以降事務局に連絡のあったもの)

卒業回数	氏名	勤務先	住所	卒業回数	氏名	勤務先	住所
[redacted]							

物故会員

謹んでおくやみ申し上げます

卒業回数	氏名	死亡年月日
65	伊藤純一郎	43. 1. 27
19	長瀬津一郎	43. 2. 20
21	江口文助	43. 4. 14
28	竹中東作	42. 10.
75	中村慎一郎	43. 5. 1